
Beast Tamer

T k

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beast Tamer

【NZコード】

N4010P

【作者名】

T k

【あらすじ】

一条咲人は、ごく普通の大学生。

既に将来のことも決めて、平穏な生活を送るつもりだったのだが、そんな彼の人生設計は脆くも崩れ去る。

コンビニ帰りに襲ってきた謎の影。いつの間にか部屋に入ってきたメイドの少女、セレス。

幻獣と呼ばれる存在と、それと共闘する者幻獣使い。そして、彼らが討つべき存在である魔獣。

セレスのハイテンションなノリに振り回されながら、咲人は戦いに

巻き込まれてこゝへ」と云ふ。

色々とポロリするシーンがあります。気分を害する可能性もあるので、「注意ください。」

プロローグ

一条咲人は、夜道を駆け抜けていた。

どれだけ走ったのだろうか。それさえも解らないほどに。携帯電話を取り出し時刻を確認したかったが、そんな余裕さえ彼には残されていなかつた。

そもそも、こんなことになつてしまつた原因はなんなのか

確か、夕飯を作ろうと思つたら、冷蔵庫に何も食材が無かつたために、コンビニに幕の内弁当とミルクティーという、気持ち悪い組み合わせを買いに行つたのが始まりだ。そして、ついでに秋の夜長のお供にエロ雑誌を買つて、帰路についたのだ。

帰る途中で、同じアパートの一階に吉田さん（三十七歳・自宅警備員）が愛犬のジハード君 吉田さん曰く、漢字では聖戦と書くらしい を散歩していたので、挨拶をした。心中で、「いい加減働けよ負け組が」とか、「ペットだからって中一病臭い名前をつけてんじやねーよ」と突つ込みながら。

夜中の公園をショートカットのために突つ切り、途中でホームレスの説教に付き合わされそうになるのを振りきつて、アパートの近くの道へと出た。彼に捕まれば、一時間も寒空の下でくだらない話を聞かされることになる。ギャンブルには興味ない。

それからだつた。小さな小道に出て、アパート前の道に曲がるうとした時に、不意に襲われたのは。

それが何だつたのかは、解らない。まさに、異形とも言つべき存在 それこそ、漫画や映画に出てくるようなモンスターを具現化したかのようだ。

現実的に有り得ない。そんなものが、この地球に存在するわけがない。理系の人間ではないが、咲人は非科学的なことはあまり信じない性質であった。

そのようなタイプの人間は、いざ非現実的なことに直面すると、

冷静さを失う。たとえ、どれだけ凶太い人間であつたとしてもだ。

そして、それは時に、的確な判断力さえも奪う。

「くそつ、俺としたことが……！」

自分の判断ミスに、舌打ちをする。

行き止まりだ。普段の彼なら気付いていたのだが、逃げるのに必死で、袋小路に入り込んでしまったのだ。

どうする。どうすればいいんだ！？

そういえば、最近、この辺りで殺人事件が多発しているというニュースを聞いたばかりだ。だとすると、こいつがその犯人なのだろうか。

いや、そんなことは有り得ない。何故なら、今、自分に襲いかからんとしているそいつは、人のカタチをしていないからだ。

言葉で表現するとすれば、「不定形な黒い影」 それ以外の表現のしようがない。

コンビニで買った幕の内弁当が偏つてしまっていたが、そんなことを気にしている余裕など無かつた。どちらにしろ、賞味期限ギリギリの、一百五十円の売れ残りだ。重要なのは、この状況をどうすべきかだ。

後ろには壁、前には謎の黒い影。逃げ場はない。

このままでは、仕留められるだけだ。それならば、一か八か賭けてみるしかない。

唯一武器になりそうな、五〇〇m-1のミルクティーベットボトルを構える。自分でやってみて情けなくなるが、このままあの化け物に食われるくらいならマシである。

そして

全身に走る衝撃。

咲人の意識は、そこで途絶えた。

第1話 朝起きたらメッシュチャレンジめられてました

とんでもない夢だつた。

深淵から徐々に戻りつつある意識の中で、咲人はそう思った。
此処のところ、ゼミの課題を徹夜でやつているのが原因かもしない。
発表はまだずっと先のことだが、このような面倒なことは先に終わらせておけば、後が楽だからだ。勿論、小中学校の頃の夏休みの宿題も、七月中に終わらせていた。

しかし、何もかも追い込むのは、良くない。これからは、程々にしておこう。

「んつ、ご主人様……はあつ……んちゅつ……んふう……」

寒い。十月中旬に入り、そろそろTシャツ一枚で寝るには厳しい季節になってきている。実家から冬着を送つてもうつべきか、それとも古着屋で良さそうなものを探すか
独り暮らしであまりお金に余裕が無いため、出来れば前者で済ませたかった。

「はあ……はあ……ご主人……さまあ……んつ……ああ……」

それにしても、何だつたのだろうか。妙にリアルな夢だといふことは覚えている。

食材を切らしていったために、コンビニ弁当で済ませるために駅前まで軽く走り、目当ての品物を買って帰る途中だ。二ートの吉田さんに挨拶して、道行く人を捕まえて説教するホームレスをやりすげして、その後に

謎のバケモノが、襲いかかってきたのだ。

途中までは、日常生活の一部のような夢であつた。

そこからはただ、ひたすら逃げた。逃げて逃げて逃げまくつた。しかし、袋小路に追い詰められて、そこで覚悟を決めて突貫して「はあつ……はあつ……」ご主人様つ……ご主人様あああつ……！」
つてか、さつきから聞こえてくる嬌声はなんなんだう。それに、

首のあたりがくすぐついたい。

まさか、エツチなDVDを付けっぱなしで寝てしまつたのだろう
か、いやそんな筈はない。ブツは先輩に貸したまま、未だ帰つてき
ていな!

じやあ、いつたい何なんだろうか？
ひとつと田を開ける。

ג. ר. ע. 12

最早 何か何たか分からなかつた

妙に重たいと思ったら、自分の腹の上に、女の子が馬乗りになつていた。しかも、どういうわけなのか、妙に現実離れした ます

音の色調のワシピーヌの上に、コレが施されたハピ

頭の上には、同じようにフリルが施されたヘッドドレス。

「あ、お氣のせいだまつたか、一主人様」

二〇〇〇年

どうやら、まだ寝ぼけているらしい。

メイドを雇うほどの金など無い。一介の貧乏学生がアパートでメイドを雇うなんてことは有り得ない。コスプレはあまり興味が無い。やつぱり、致すなら普通が良い。というか、それ以前にカノジョ持ちでもない。半年前に別れたばかりだ。

確かに人肌が恋しいと思う年頃ではあるが、此処まで貪欲だったのか。少し、凹む。

ただ疲れているのだろう。今日は休みだから、もう少し寝ていよ。

「もうっ！ ご主人様、二度寝しないで起きてくださいっ！」

痛いなんてもんじやない。この表現しがたい激痛は、男にしか解

るまい。

咲人は下腹部を押さえこみながら、大声で絶叫してのたうち回つた。

「な、な、何しやがる……」「の……野郎……あああああ……」

最早、夢とか現実とか、そんなことはどうでもよかつた。とにかく、この痛みが早く収まつてくれ。つてか、収まらないと死ぬ。普通に死ぬ。

効果があるのか解らないが、心の中で素数を数え、般若心経を唱える。それでもしないと、やってられない。

「ん……待てよ……？」

痛いということは、これは紛れもない現実のことである。

見上げると、やはりメイド服を着た女の子が立っている。股間を押さえながら仰向けになるという情けない格好だが、この際仕方が無い。

「おはようございます、」「主人様」

メイド娘は腰の前で手を揃えて、ぺこりと頭を下げた。

「あ、ああ。おはよう　つて、そうじやねえつての！」

がばつと起き上がり、メイドの少女を見据える咲人。

改めて見てみると、とても可愛らしい少女だ。かなり小柄で、年齢は十四、五といったところか。顔には幼さがくつきりと残つており、日本人離れした金糸のような輝きを放つ髪は、ポニーテールに結われている。

また、小柄な割に肉付きがよく、メイド服の上からでも大きめの胸が、その存在感を誇示している。成長が早いのか、元の素材が良いのか

「だいたいお前誰なんだよ？　なぜに俺の部屋に上がつてるわけ？　他にも、なんで人の身体を舐めていたのかとか、股間を蹴り上げたのかとか、色々聞きたかった。」

質問攻めにしたいという衝動を抑えて、まずは相手の素性を確か

めるべく、尋ねる。

すると、待つてましたと云わんばかりに、メイドは再びペコリと頭を下げて、自己紹介を始めた。

「私は、ピーストライマー幻獣使い結社ユグドラシルより派遣されました、セレスと申します。ワーキャットの血を引いており

何を言つてゐるのかサッパリだつた。

十四、五歳であるう年齢から推測すると、その手の病気が発症しちやつてゐる子なのかもしれない。アニメとかに感化されて、「わたしは異世界から来たお姫様な」とか「静まれ、俺の腕よ……」とか言つちやつてるような。

自分に変な設定を付けて、カツコイイと思いたい年頃なのだろう。尤も、数年後に、柱に頭を打ちつけたくなるのは間違いないだろうが。実際、咲人も中学時代に同じような人物を見てきたが、その者達がろくな人生を歩んでいないことを知つてゐる。

「……あのさ、悪いこと言わないから、そういうのは大人になつてから恥ずかしい思いするから、やめておけ。恥ずかしさのあまり京東北線にダイブしようとしてそれ以来音信不通の河村君と、三十七歳にもなつて犬にジハードなんていう名前を付けている痛々しいオッサンを知つてゐる」

中学時代の級友である音信不通の河村君と、一階の吉田さんを悪い例として挙げてしまつたことを少し申し訳なく思いながらも、忠告をする咲人。

「はあ、俗に言う中二病という奴ですね。しかし、若いうちに発症しておかないと、後々発症した時に痛い目に遭いますよ。」

「ああ、俺はもう治つてる……と思う。あの頃は、校舎の窓ガラスを割つたり、盗んだバイクで走りだしたり、未成年なのに無理して煙草吸つたりしてゐたが。勿論、高校に入る前に更生したぞ。内申に響いたら、まずかつたからな」

そう考へると説得力が無いのだが。

「それよりだ。そんな中二病がどうのこうのなんてどうでもいいん

だ。ぐだらねえ。だから、お前は何なの？ なんで俺の部屋に上がつているわけ？」

さつきと同じ質問だ。あまり同じことを聞くのは好きではないが、意味不明なことを言つていて、仕方が無い。

「ですから、私はコグドラシルより派遣されました、セレスと申します。ワーキャットの血を引いており つて、ご主人様、なぜ電話を？」

「この場合つて、不法侵入になるんだっけか？ 見ず知らずの人間が部屋に入り込んで、意味不明なことを言つてている つて感じで言えばいいのかな」

受話器を取り、ボタンを押そうとしている咲人を見て、セレスと名乗る少女は悟つた。

「ちょっと！ お待ちください！」主人様つ！」

「「」はあつ！？」

セレスの拳が、咲人の頸にヒットした。

咲人の身体が、空中に投げだされる。横からのヒットの筈が、何故か上向きに吹つ飛ぶ。さながら、一昔前の少年漫画みたいな吹き飛び方だ。それこそ、牡羊座の先代の教皇が「うろたえるな小僧ども！」と叫びながら両手を上げただけで、相手が吹き飛ぶような。勿論、落ちる時は、頭からだ。

「ええと、これで暴力も振るわれて……」

「ご主人様？ 警察を呼ぶのは結構ですが、果たして信じてもらえるんですかね？」

何処か黒い笑みを浮かべているセレス。

「まず、あなたほどの年齢の方が、未成年と思われる少女を部屋に連れ込んでいる。そして、私の格好ですね。メイド服に首輪、どう見ても監禁プレイをしているようにしか見えないかと」

「………… てめえ」

つまり、だ。このご時世、未成年にいかがわしいことをする不届き者が増えているため、この現場を見られたら、真っ先に疑われる

のは咲人なわけで。

それに、仮に信じてもらえたとしても、今の一撃のことだ。警察に危害を及ぼし、より面倒なことになる可能性もある。

「お解りいただけましたか」

悔しいが、この現実を受け入れるしかなさそうだ。

「あのさ、俺は今どういう状況になつてんのか解らないんだけど、説明していくれないか」

「ほんと、いい歳して現実を受け入れられないなんて。そんなんだから、カノジョに振られるんですよ。まあいいでしょう、私が説明しますね」

「現実離れしてるのはてめえだろうが。それに、人の古傷に触れやがつて。なんで別れたことを知ってるんだよ」

「一発ぶん殴りたい。そんな衝動をなんとか抑える。

「ご主人様は、昨晩のことを覚えてますか?」

「えつと……、食材を切らしてコンビニ……。つて、あれは夢じやなかつたのか?」

「はい、現実ですよ。そこに、えつちな雑誌が置いてありますでしょう? ご主人様は、脚フェチなんですね。あと、一次元ではケモノミミ好きと。ああ、幕の内弁当とミルクティーは、私が美味しく頂きました」

卓袱台の上には、ブツと空になつた弁当の容器とペットボトルが置いてあつた。

「どうやら、あれはマジらしい。」

「解つたけど、何で俺の飯を勝手に食つてんの?」

「そして、帰る途中でしたね」

スルーされた。

「謎の黒い影に襲われて、愚かにも袋小路に追い込まれてしまつた。そこで、弱いくせに無謀にもミルクティーのペットボトルを構えて立ち向かつて」

さり気なく毒を吐いているのが腹立つた。

「そこで記憶が途絶えたんだよ。お前はなんか知っているみたいだけど、いつたい何なんだ？」

「あれはですね……、私達が……いえ、幻獣使い達が討つべき存在です」

今までの人をおちょくつたかのような態度が嘘のようだ、セレスの表情が曇る。

「あれに、私の前のご主人様は殺されたんです」

最近、この辺りで発生している殺人事件。もしかしたら、それが関係しているのかもしれない。

だが、未だ信じられない。いつたい、自分の身に何が起きているのか。

このまま追い出せば、面倒なことに巻き込まれず、何気ない生活を送れるかもしれない。しかし、彼女の悲しげな表情を見ると、心をナイフで抉られたかのような感覚に見舞われる。

（ちくしょう、何だつてんだよ……）

ああ、やはり自分は甘いな

「あー、なんていうのかな。未だ状況が掴めないんだけどさ、色々とワケアリみたいだし、とりあえず何かあつたら協力するよ」

「ふふふ……うふふふふふ……」

「な、何だよ急に……」

「聞きましたよ、その言葉！ そして、しっかりと録音させていただきました！」

まるで一昔前のアニメに出てくるような、魔王様のような仕草で笑い始めるセレス。完全に悪役の顔である。可愛い表情が台無しだ。懐から携帯電話を取り出し、ボタンを押す。すると、今までの会話がしつかりと録音されていた。それはつまり

「もう言い逃れは出来ませんね」

「…………」

携帯電話から流れ続ける、咲人の言葉。

そして

「じつっ！」

協力するかどうかはともかく、一発殴つてやらなければ気が済まなかつた。

第2話 ひょっとファミレス行ってくる

食材が無いため、朝食は駅前のファミレスで取ることにした。一人暮らしの貧乏大学生としてあまりお金はかけたくないが、やはり食欲には勝てない。

朝っぱらからミラノ風ドリアというのは、なかなか重たい。一百九十九円でそこそここの味のため、学生の味方なのが、朝から食べるにしては厳しい一品だ。モーニングメニューもあることはあるのだが、この店舗ではやつていないらしい。少し、悔しかった。

しかし、節約のために頼んだ咲人をあざ笑うかのように、セレスの前にはマルゲリータとミックスグリル、そしてカルボナーラが並んでいる。勿論、ドリンクバーもついている。一人分で千円を超えている。有り得ない。贅沢すぎる。

落ち着いて話が出来る場所ということで、安いファミレスを選んだのだが、このザマだった。これなら、朝ごはん抜きでよかつたのかもしれないが、激しい後悔に苛まれた。

「ドリンクバーで遊ぶな、ミラ」

案の定というかなんというか。セレスのグラスには、得体の知れない液体が注がれていた。色から推測すると、コーヒー + カルピス + メロンソーダだろうか。味は想像もしたくない。

咲人も過去に何度か目撃したが、飲まされる側だった。だから、飲み会の二次会でドリンクバーのあるファミレスに行くのは嫌だつた。しかし、酔っ払つた勢いならともかく、セレスの場合は素面でやつているのだから、性質が悪い。精神年齢は小学生並みなのだろうか。

「えー、遊んでもせんよ。カクテルも色々混ぜたりするじゃないですか。私は様々なドリンクを混ぜることにより、更なる味の追求を

「カクテル作りとドリンクバー罰ゲームを一緒にするな！」

セレスの顔をニックスグリルの鉄板に沈めてやりたかったが、これは我慢だ。

そんなことをして叫ばれれば、まず疑われるは咲人だ。痴漢の冤罪が増えている世の中のため、慎重にならなくてはならない。

そして、セレスの格好だ。メイド服に首輪という、どう見ても街中を歩くような格好ではない。そんなものを装備した女の子と歩いているのだから、ただでさえ視線が痛いのに。

「あのさ、メイド服はいいんだけど、首輪は何とかなんないの？ 正直、周囲の視線が痛いんだけど。まだ朝早いから、人が少ないからマシだけど」

「いえ、それは出来ません。メイド服以外の服なら、結構持つていいので問題ありませんが」

「なんで？」

「先程もお話したように、私は普通の人間ではありません。もう一度、先程のことを纏めますね」

料理が運ばれてくるまでの間だ。咲人は延々と、セレスの胡散臭い話を聞かされていた。

幻獣使い 確か、そのようなことを言つていたか。彼女曰く、咲人にはその幻獣使いの素質があり、彼を求めてきたというのだが。昨日襲いかかってきた黒い影は、その幻獣使いが倒すべき存在なのだという。無謀にもペットボトルで殴りかかって返り討ちにあつたところを、彼女が助けてくれたらしいが

「あー、よく解なんないけど、そいつらを倒すのを協力してほしつてことか？」

「はい、そういうことです」

そんなゲームの世界でしか有り得ないようなことが有り得るのだろうか。しかし、あの出来事は夢にしてはあまりにもリアルすぎた。もしかしたら、まだ夢を見ているのかもしれないが試しに頬をつねつてみたら、痛かった。現実だった。

「でもなあ……」

話を聞いていて解ったのは、自分にも戦つてほしいということなのだ。

高校時代まで、体育の成績は十段階評価で常に8以上だったため、運動神経に関しては問題ない。しかし、いきなりあるようなバケモノと戦えと言われては、やはり躊躇してしまつ。

「そこで、私の出番なんですよ」

「はあ……」

どうやら、戦いのほとんどはセレスが片付けてくれるらしい。確かに、あれだけの臂力があれば、問題ない氣もするが。「で、その首輪がどういった関係が？　まさか、それを取ると真の姿が……」

「ザツツライト」

まさかとは思つたが、マジだつた。

最早突つ込むどころか、それを受け入れられるようになつてしまつた自分が恐ろしい。だんだんと彼女のペースに乗せられてくるのかもしれない。

「取るどどうなんの？」

「ですから、真の姿が露わになります」

「だから、どんな姿に？　具体的に言つてくれよ」

「ご主人様のエッチ

ぐしゃ。

やつてから周りの視線のことを気にしたため少し後悔したが、どうやら平気のようだ。それに、食べ終わつていたので問題ない。

セレスの顔を、カルボナーラの皿に圧し込んでやつた。ホワイトソースが顔からメイド服の胸元あたりにかけて飛び散つた。

「あうう、何するんですかあ……」

調子に乗らなければ可愛い女の子なのだが　無駄な言動のせい

で、何もかも台無しである。

「その辺りは実戦を踏まえた方が、解ると思いますよ。丁度、いい感じにお客さんがいらっしゃったみたいですから」

ホワイトソースを拭き取ると、セレスは立ち上がった。今までのヘラヘラとした表情は何処に消えたのか、凛とした、鋭い目つきになっている。もしかしたら、こちらが彼女の本賞なのかもしれない。

次の瞬間、周囲の空氣が張り詰めて行くのが解った。景色は何も変わらないが、今までの感覚とは違

日の夜みたいに。

「ではご主人様、覚悟はよろしいですか?」

「待てよ、何が何だか知らないが、此処は店の中

「心配いりません。広い範囲に結界を張つたので、外部には影響はありません。……私が斃されない限りは」

力チャリ と金属音が鳴り

軽いた音を立てて 首輪が床に軽かた

1

咆哮とも取れるような、勇ましい喊声。それが、この可愛らしい少女から発せられているものであることに、咲人は驚きを隠せなかつた。

に、光の洪水だ。

例えるならば、戦うヒロインが変身するシーンだろうか。セレスの着衣が解けて、身体のラインがくつきりと露わになる。正直、目のやり場に困つたので、咲人は視線を逸らした。あまり凝視しては、色々とマズイ。

やがて、光が收まる。すると、そこには

「力を解放するのも久々ですね。本来ならば、ユグドラシルの規約で、ご主人様の許可を頂かなければならないのですが。今回は実戦を兼ねるということで、自らグレイプールを解かせていただきました」

かなり身軽 露出の多い 格好だ。胸と腰を覆うビキニのようなものと、手足を護るレザー製のガントレットとブーツ。その上から、毛皮のコートを羽織っている。若干、背丈が伸びて、より身体つきが豊満になったようにも見える。

それだけならまだ良い。しかし、彼女には人間ではありえない器官が発現していた。

頭の上から生えた獣のような耳と、腰から伸びる長い尻尾。どちらもふさふさとしているのが見るだけで解る。まるで、ネコ科の動物のそれのように。

「…………あのー、どちらをまで？」

あまり考えたくはなかつたが、確認のために咲人は尋ねた。

「ふふっ、驚かれるのも無理ありませんね。私はセレスですよ、ご主人様」

確かに、声はセレスのものだ。その顔付きには、彼女の面影が残っている。しかし、少し成長したかのような体躯と、何処か勇ましい雰囲気は、先程までの彼女とはまったく別物だ。何処かとぼけたような少女のものではなく、凛とした女戦士の如く

驚くというより、現状を受け入れるのが困難だった。

ただ言えるのは、これが夢などではなく、現実に起こっていると

いうことだ。

「…………なんなんだよ、もう」

「大丈夫です。私が斃されない限り、ご主人様が死ぬようなことはありません。死ぬほど痛い目に遭うことはあるかもしませんが」

「勘弁してくれよ！」

「あなたそれでも男ですか。だらしないですね」

「ぐつ…………」

得体の知れない存在とはいえ、そのようなことを少女に言われては、やはり心外だ。

流石にプライドを傷つけられるのは嫌だつたため、ついむきになつてしまふ。

「解ったよ！ 戦えばいいんだろ！」

何か武器になりそうなものを探すが、見当たらない。流石に、テーブルの上に置いてあるナイフやフォークを使うわけにはいかないだろう。自分の身を守ることが第一だが、飲食店でバイトをしていると、どうもそのようなことに気を遣つてしまつ。

「武器は必要ありませんよ。ご主人様は、サポートをしてくだされば結構です」

「サポートつつても、何をすりや……」

「まだ完全な契約を行つてはいませんが、既にご主人様には、能力が発現している筈です。試しに、あちらに向けて何かを念じてみてください」

セレスが指差した先は、店の入口だ。レジで会計をしている客がいる。

「ああ、周りのことですが、問題ありません。一時的に、此処の空間を現実世界と切り離しているので、危害はありません」

先程言つていた、結界というものなのだろうか。

あまり乗り気ではなかつたが、このままでは進展しなさそうなので、入口に向けて強く念じてみた。

「え……！？」

青白い閃光。

一瞬だつたが、見逃さなかつた。自分の指先から、電撃のようなものが、迸つたのを。

「なるほど、やはりあなたを『主人様として選んで正解だつたようですね。《雷撃》^{ライティング} 今日の術者ではなかなか発現できない力を……」

自分でも驚きだつた。こんな人間離れした力など、ミュータントを題材とした映画や、守護星座の力を借りて拳で闘うアニメの中で

くらいしか見たことない。

「これ……は……？」

「来ます、準備を！」

全身に激しいプレッシャーが襲いかかる。

それは、セレスから発せられるものではなく

『その場に現れた異形』のものであることが解る。

「ギガス……。強い腕力が特徴ですが、この個体は私の敵ではありますね。スタッフホールに流れるとしたら、雑兵Aとか、そんなポジションでしようか」

よく解らない例えに突つ込みたいと思いつつも、現れた異形を見据える咲人。

戦う気ではいたものの、やはりこのような存在を目の前にしては、身体が動かない。

目の前に現れたのは、まさに巨人とも言えるような体躯を持つていた。緑色の不健康そうな身体は筋肉で覆われており、手には咲人の体格より太いであろう棍棒が握られている。

バケモノだ。こんな奴が、なぜ？ 漫画やゲームに出てくるような存在が、なぜ？

こいつはヤバい。その場から逃げ出したかったが、身体を動かせない。

「何なんだよ……、何なんだよこいつは……！」

咲人は動こうとしたが、それは恐怖により出来なかつた。情けない。あれだけ強がつておきながら、このザマだ。やはり、まだ現実を受け入れられずにいるのだろうか。

「グゥオオオオオオオオオオツ！」

それは雄叫びなのか。

緑色の巨人は、セレスに向けて棍棒を振りおろしてきた。もし、あれに当たれば、圧殺 いや、四肢が吹き飛ばされてしまうに違いない。

だが、セレスは避けようとすらしていない。

「バカツ、避け

」

声は届かなかつた。

激しい打撃音と共に、辺りに砂埃が舞つ。

床は大きく陥没していた。その場にあつたテーブルや椅子は原型を留めておらず、瓦礫と化したモノが四散している。

そこに、セレスの姿はなかつた。

「まったく、この程度の敵を恐れているようでは、先が思いやられますね」

上空からの声。嘲笑するわけでもなく、怒るわけでもなく、ただ淡々と咲人に對して発せられた。

ギリギリのところで回避したのだろうか。セレスは傷一つ負つていなかつた。

セレスは巨人の懷へと飛び込み、拳を振り翳した。

そして

「ハアアアアツ　！」

喊声とともに、巨人の腹部に拳を叩きこんだ。

目を疑つた。

薄々気付いてはいたが、やはり、姿形は少女のものなのだ。そんな身体の何処に、これ程の力が秘められているのだろうか。

セレスの拳は、巨人の身体をぶち抜いていたのだ。傷口からは、夥しい量の血液　　のような紫色のもの　　が、びしゃびしゃと流れ出ている。胃の中のモノがこみ上げてきたが、咲人は何とかそれを抑えた。

それで終わりではなかつた。巨人はすぐに反撃に出ようと、再び棍棒を振り下ろす。しかし、すぐにセレスは拳を挽き抜くと、巨人の棍棒を片手で受け止めた。やはり、尋常ではない臂力だ。

「これで決めるツ　！」

巨人の腕を踏み台にして、再び空中へと飛び上がるセレス。

そして

ドグチアツ。

擬音語で表せば、そんな音だった。

先程まであつたはずの巨人の頭部が、何処かへと消えていた。暫くして、湿り気を帯びた音と共に、紫色の液体が首から噴き出し、原型を留めていない肉塊が床に転がり落ちた。しばらく、ワインは飲めそうにない。

「ふう、こんなものですね」

軽やかな動作で、地面に降り立つセレス。

彼女の脚から下は、紫色の液体で汚れていた。

第3話 DX変身首輪

実際に便利な設定だと、咲人は思つた。

戦いが終わつてから、滅茶苦茶になつていた筈のファミレス内は、すっかり元通りになつていたのだ。空間を切り離して云々というのは、事実らしい。

朝つぱらから疲労困憊だつたが、少しずつ状況を整理することが、今の彼には必要だつた。

自室に戻り、お茶を淹れる。安アパートとはいえ、自分の部屋にいると落ち着くものだ。

セレスは咲人のP.S3を稼働し、ゲームにどっぷり嵌つていた。光速の異名を持ち重力を自在に以下略 ナンバリングタイトル第十三作目のアレだ。咲人にとっては音楽とグラフィック以外はあまり受け入れられないゲームだつたため、クリア後に積んでいたのだが。

「やっぱり、ジャマーとエンハンサーがいると違いますね。多くのゆとり世代は、戦闘が難しいだと嘆いていますが、そういう人達は、アタッカーとブラスターしか使っていないからなんですよ。脳味噌筋肉な人間つて、ホント馬鹿ですよね」

「売ろうとしていたソフトを引っ張り出してきてんじゃねえよ……。つてか、なんか寛いでるけど、お前俺を守る気あるのかよ」

そう言いつつも、お茶とお茶菓子を差し出している辺り、世話好きなのだろうか。

「ご心配なく。契約を結んだ以上、どちらかが死ぬまでお守り致します」

ゲームに夢中なため、背中を向けたまま卓袱台の煎餅を取るセレス。

戦闘が終わつてから、彼女の服装は、首輪とメイド服に戻つた。もう少しマシな服装はないのだろうかと突つ込みたいのだが、

首輪は戦闘時以外は外せないのだという。

それは、先程のことを思い出すと、何とか納得することが出来た。
首輪　　グレイプニルというらしい　　は、セレスを始めとする幻
獸^{スト}の力を制御するものなのだという。初めは信じられなかつたのだが、いざその場面を目にしてみれば、納得せざるを得ないのだ。

幻獸

セレス曰く、それは『力を持った何か』なのだという。本人も解つてないあたり胡散臭いが、先程の戦いを見ていると、嘘ではないことは確かだ。その幻獸を使役あるいは共闘するのが、幻獸使いなのだというが

「どうすんだよ、この力……」

軽く念じると、指先から弱々しい雷撃が迸つた。

確かに、護身用としては便利かもしれない。しかし、こんな力を日常生活で使おうものなら、大きな騒ぎを引き起こしてしまつのは間違いないだろ？

出来れば、普通の生活を送りたいのだが
(さつきのあの表情……)

数時間前　朝食に出かける前のことを思い出す。

明るそうな雰囲気を振りまいていた筈のセレスが、ふと見せた悲しげな表情。それを見せながら、言つていた。「前のご主人様は、あれに殺されました」と。

本来ならば、警察などの国家権力に頼るべきなのだろうが、どうもそういうわけにはいかないらしい。

「ゲーム中悪いけどさ」

「はい、何でしようか、ご主人様」

ちょうど、バトルリザルトの画面になつていた。キリが良いところで声をかけたつもりだ。

特に気にすることもなくゲームを中断すると、セレスは咲人の方へと向き直つた。

「もう少し、お前のことや幻獸使いとやらについて教えてほしいん

だけど。さつき聞いた固有名詞だけじゃ、パルスのファルシのルシがページで「クーンみたいな感じでサッパリなんだよ」

やはり、まだ色々と知らなくてはならない。

成り行きでこのようなことになつてしまつたが、やるならば最後までやり通すつもりだ。中途半端は嫌いだった。

「この世の全てを、科学で証明できないというのは解りますか？」
真摯な態度で臨んでくるセレス。普段の天然じみたのは演技なのだろうか、彼女からは真剣さが伝わってくる。咲人は突如眞面目になつたセレスに戸惑いを覚えたが、後のことを考えて眞面目に聞くことにした。

「まあ、それはな。胡散臭いとは思つけど、テレビとかで超常現象みたいなのをよく見るし。それに、あんなものを間近で見せられれば、信じるなと言われても無理だよ」

彼女達の存在も、その科学で証明できないもののひとつなのだろう。

「でも、いまいち解らないんだよな。その幻獣使いつてのが何なんか……。そもそも、何故俺がそんなものに……」

「私は前のご主人様を戦いで失いました。主を失つた幻獣は、提供される力が断たれることにより、消滅する運命にあるんです。それを免れるためには、新たな主を見つけなければなりません」

「それで、その新たな主が、俺だつたつてこと?」

「はい」

セレス曰く、コンビニ帰りの咲人を偶然見つけて、そのままノリで契約したらしい。

咲人からしたら迷惑な話であつたが、彼女の力がなければ、あのまま謎の影に殺されていたに違いない。そう考えると、彼女に感謝すべきなのだろう。

いや、待て。そうすると、黒い影はいつたい何者なのか。また新たな謎が増える。

「それじゃあ昨日の黒い影つてのは……」

「あれも幻獣の一種ですが、この世に害をなす存在。私達は、魔獸イヴルと呼んでいます」

「魔獸……？」

「魔獸や幻獣は本来、こちらの世界』主人様達が暮らしている世界ですね。こちらには干渉しないのですが、時々一部の個体が、干渉するんです」

「昨日の黒い影や、サイゼで襲つてきたあの緑色の『カブツもそつなのか？」

「Exact1y」

何故そこだけ英語になるんだ。突つ込みたかつたが、話の腰を折るわけにはいかないため、我慢する。ちなみに、『そのとおりでござります』という意味だ。

「つまり、俺がお前の主で、お前と共にその魔獸とやらを倒すのを手伝つてほしい。つてことでOK？」

解つてくれて嬉しいのか、セレスは笑顔で頷いた。

「それより、普通の生活はどうなんだ？ なんか、変な力も備わつたみたいだし」

試しに、指先から軽く電撃を走らせる。

青白い電光は僅かに空中を进ると、小さな音を立てて四散した。

「あれ、嬉しくないんですか？ 普通の方は、このような力を手に入れると、喜ぶのですが」

セレスは不思議そうに首を傾げた。

「あー、なんていうのかな。情けない話だけど、『』いう力って、なんか怖いんだよ。映画とか見ていてカッコいいと思つたことはあるけど、使うとなると話は別でさ。お前が思つてるほど、人間ってのは賢い生き物じやないんだよ」

「そうでしょうか？」

「歴史とか習つてると、解るんだよ。人間つてのは、大きな力を手に入れると、それを使はずにはいられないってのが。そうでなきや、世界大戦とか、核兵器問題とか。力の使い方を間違う奴が

いなければ、歴史の表舞台には出てこなかつただろうな。

確かに、正しい使い方をすれば、それは心強い味方になる。原子力だつて発電のためになるし、ダイナマイトも鉱山開発で役に立つ。だが、誰もがそういう使い方をするわけじゃないし、聖人君子のような輩も、人間である以上間違いは起こすわけだ。

……だから怖いんだよ、俺は。もし、間違つた使い方で、誰かを傷付けたら 取り返しのつかないことをしてしまつたら そう思うとな。せつかくこんな力を貰つて悪いけど、素直に喜べないんだ

結構真面目な意見を述べたつもりだ。格好付けたつもりではない。歴史上で偉人とされている人物を見ていると解る。結局、それは書物に記されたものに過ぎないのだが 誰もが手に入れた力に溺れ、やがては落ちぶれていつていて。

「ふふつ、どうやら、あなたをご主人様として選んだのは、正解だつたようですね」

二コリと可愛らしい笑顔を見せるセレス。

本当に、真面目にしていれば可愛らしいのだが、なんでこいつはたまにワケの解らない発現をするのだろうか。妙に、サブカルチャーに詳しいし。

「では、本契約と参りましょうか」「は？」

突然、セレスは前かがみになり、身を乗り出してきた。待て。近い。なぜ、近寄つてくるんだこいつは。

「待て、おいっ」

まさに、目と鼻の先といったところに、少女の顔が迫る。人間ではないとはいえ、姿形は人間の少女そのものだ。このように顔を近づけられては、やはり恥ずかしい。それに、重力に従つて、大きめな胸が揺れている。これも精神衛生上よろしくない。勿論、性的な意味で。

甘い香りが漂つてくる。少女特有の、優しく可愛らしい香りだ。

理性を押さえるのがきつい。別れた彼女もこのように迫ってきたことがあつたため、経験を積んでいることは積んでいのだがやはり、それでもきつい。

そして

「ご主人様……」

だんつ。

押し倒された。

姿形は少女だが、臂力はそれのものではない。腕を動かして振り払おうとするも、抑えつける力は尋常ではない。

逃げる 逃げられない！

「なにを……んんつ！？」

口を塞がれた。セレスの唇で。つまり、思い切り口づけされたのだ。

その場の時間が、止まつた。ザ・ワールドだ。

「ん……ふつ、んひゅ……ごひゅじん、ひゅあ……」

舌を入れられた。

くちゅくちゅと水音が鳴り、口の中が蹂躪されていく。

（うおおおおおおい！？ 待てよ、今まで生きてきた中で、こんなイベント聞いてないぞ！？ 前のカノジョとも、こうなるまで一ヶ月はかかつたぞ！？）

このままではまずい。下半身的な意味で。

そもそも、何なのか。いつたい何が起きているのか。今まで以上に、この現実を受け入れられない。いや、受け入れてはいけないような気がする。

余程親密な関係にならない限り、これほどの深く熱いベーゼはありえないだろう。いや、それ以前に、現実で此処までティープな接吻をする者が、いるのだろうか

それに、何だろう。色々と熱いものが流れ込んでくる。それは物理的なものではなく、身体の底の方から湧きあがるような熱だ。身体が燃え上がりそうだ。骨が溶けているみたいだ。

「くつ、くつ、くつ……」

理性が吹き飛びそうだったが、その接吻はすぐに終わりを告げた。ほんの一分足らずの行為であったが、それは咲人にとって、非常に長く感じられた。

「んはつ……はあ……はあ……」

ぴちゃり。

いやらしい音が鳴り、唇と唇が離れる。二つの唇の間を、粘り気を帯びた糸が引く。

抑えつける力が弱まり、よつやく自由になつたが

「……契約は為されました」

「色々と待て。冷静になれ。つてか、説明しろ」

ごすつ。

起き上がりつて、セレスの頭に軽くチョップを入れてやつた。別に嫌な気分ではない。むしろ心地よかつたのだが。やはり色々と準備というものがある。何事にも、段取りが必要だ。

「あうう、痛いですご主人様……」

「だいたい、今のは何なんだよ？ 朝っぱらから盛りやがつて、犯^{さが}ヤつちまうぞコラ！」

理性を抑制するのがやつとであつたため、脅迫とはいえ半分本気になりそうだった。

「本契約ですよ。今まで仮の契約だったんですが、たつた今、私はあなたを本当の主として認めたのです」

「……今のティープキスが、その本契約に必要な行為だったのか？」

「はい。ああ、まだ色々とお話することがあるのですが」

もう、勘弁してくれよ。

ただでさえ、多くの設定を理解するといふのに、これ以上何を聞けといふのだるう。しかし、このまま逃げ出しても、何の進展もないだらう。それに、追い出すのも気が引ける。

やはり、じうじうところで甘くなつてしまつ自分が許せなかつた。

「これによつて、このグレイプニルを解くには、ご主人様の力が必

要になりました

「俺の力？」

「はい。このグレイプニルは、入つてみれば、飼い犬が逃げ出さないように嵌めておく首輪のようなものですね」

「首輪のようなものつて、それ首輪だよな」

「つまらないツツコミですね。もう少しひねつたらどうですか。個体によつて異なるだけで、たまたま私のグレイプニルがこのような形をしているだけです。設定などを話すとややこしくなるので、脳味噌の足りないゆとり世代のご主人様には

「半殺しにされたいのか？」

セレスも本心で言つてゐるのではないのだろうが、此処まで言われば流石の咲人も力チンとくる。

さて、どうやつてお仕置きしてやるつか。

「キレイやすいのも特徴なんですね。ほんと、こうこう莫迦は死ないと治りませんね。これだからゆとりは……ひきにつ！？」

むにいにいに。にぎききききき。

咲人はセレスの頬つぺたをつまんで、思い切り抓つてやつた。今まで最も調子に乗つた発言だつたため、ついカツとなつて抓つてしまつた。

女の子のためか、柔らかい感触だ。まるで、大福のように伸びる。泣き叫ぶ顔がなかなか可愛らしい。少し面白いこと思つてしまつた。

「ごめんにやひやい、ひょうふあんふえふ！…」

『ごめんなさい、冗談です』と聞き取れた。流石に引っ張りっぱなしも可哀想なので、程々のところで離してあげる。

相当痛かつたのか、瞳に大粒の涙を浮かべながら、頬つぺたを擦るセレス。もしかしたら、今までのお仕置き　といつ名の突つ込みで、いちばん効いているかもしれない。

「ぐすん……」

「戦いになつたら、そのグレイプなんぢやらつてのを、俺の力で外すんだな？」

「はい。これで私達は一心同体、一蓮托生です

「……ま、こうなつたら最後までとことん付き合つてやるよ

溜息をつぐが、此処まできたらもう引き下がれないだろう。

どうせなら、最後まで突っ走つてやる。

「勘違いするなよ。俺は中途半端なのが嫌いなだけだ。別に、お前の

のためにやるわけじゃないからな

「ツンデレ？ 可愛いとこあるんですね、『主人さ……ひぎい

！？』

こいつはまだ調子に乗るか。

咲人は再び、セレスの頬っぺたを引っ張つてやつた。

第4話 いつてみヨー ドー

夕刻。

繁華街のネオンが点灯し始め、既にカラオケや居酒屋の勧誘が始まっている。道を行くサラリーマンや学生達に声をかけているようだが、あまり釣れているような様子はない。不景気のため、外食で済ませる人間が減っているのだから、仕方が無いだろう。

咲人は食材を揃えるべく、スーパーマーケットへと向かつていた。この時間から行けば、タイムサービスをやっているため、食品を安く手に入れられることを、長年の経験で学んでいる。

「あのさ、一応聞きたいんだけど、いつもこいつやってついてくる気なのか？」

咲人は面倒臭そうに、傍らを歩くメイド娘に尋ねる。

「え？ 何処までもお供する気ですが。それはもう、地獄の底までああ、やっぱりか。

そんなことだらうと思つたが、このままでは色々とやりづらい。というのも、普通の生活を送るのは問題ないと言っていたが、このように常に付きまとわれてしまつては、咲人としては勘弁してほしかつた。特に、バイト先や学校について来られては、仕事や勉強の邪魔になるし、ほぼ確実に仲間にからかわれるからだ。いや、まずついて来られたら、からかわれる以前に色々と問題になるに決まつてている。

さて、どうしたものか。明後日までに対策を考えなくてはそれに

「首輪はストールで隠したけど、やっぱり視線が気になるな……」

咲人は、ちらりとセレスの首元に視線を移す。

彼女の首には、黒いストールが巻かれている。咲人が過去に使つていたものだが、メイド服には少々不釣り合いにも見える。

そして、首輪はなんとか隠したものなの、やはりメイド服は街中で

着るようなものではない。そのためか、道行く者達が物珍しそうに二人を見つめてくる。

「自意識過剰なんぢやないですか？ もつと堂々としましょうよ」

「……おい、誰のせいだと思つてやがる。他に服があるつて聞いたから期待したけど、一番マシなのがそれだからな……」

遡ること一時間前

出かける時にメイド服以外の衣装を着るようセレスに要求したのだが、彼女が持つている衣装というのが、常軌を逸しているものばかりであった。

その一。スクール水着。こんなもので街中を歩いたら、変態痴女である。セレス曰く、局部の露出はしていないため猥褻罪には問われないらしいが、やはり社会通念で考へるとよろしくない。

その二。体操服。一応、体育祭シーズンではあるが、今時ブルマを履いている学生など聞いたことが無い。

その三。ナース服。血糊さえなければ、勤務中の看護士に見えたかもしれないのだが

その四。甲冑。ご丁寧に剣まで装備。職務質問行きです。

その五。ボンデージファッショն。帰れと思つた。

などなど、どれもコスプレ用の代物ばかりのうえ、一部のフェチが大喜びするようなものしかなかったのだ。その中でも、まだマシなのがメイド服というのが悲しすぎる。

他の衣装はそれよりも酷く、一緒に歩かれようものなら、恥ずかしさのあまり「アイキヤンフライ！」と叫びながら、武上線にダイブしていたかもしれない。ただでさえ事故が多い電車なのに、それを止めて人様に迷惑をかけるなんてことは、絶対にできない。「おかしいですね、前のご主人様はこのような衣装を着ると、喜んだのですが」

どんな変態だつたんだよ、と突つ込みたかったが、死んだ人間を

貶めるのはよくないと思い、何とか口を噤む。

「ああ、良いこと思いつきました。いつのこと、全裸に首輪で、ご主人様が引き回すつていうのはどうですか？ 普通は夜の公園でやるみたいですが、このように人通りが多い中でやってみるのも面白いかもしれませんよ？」

駄目だこいつ……早くなんとかしないと……

そんなくだらないやりとりをしているうちに、フローレが描かれた看板が見えてきた。行きつけの小売店だ。数年前までは赤と青の地に白い鳩が描かれていたのだが、持株会社傘下の子会社となつてから、図柄が変更されたという。

やはり時間が時間のためか、店内は多くの主婦が訪れていた。ようくドラマであるような血で血を洗うような争奪戦はないようだが、安く良い品を買つには、のんびりしていられない。

「ああ、なんか食いたいものとかある？ あまり豪華なものは作れないけど」

成り行きでだが、セレスと一緒に暮らすこととなつたのだ。記念といつてはなんだが、彼女の希望を聞いてやるものいいかもしれない。勿論、フォアグラだのキャビアだの言つてきたら、張つ倒す気だが。

「ご主人様つて料理できるんですね。凄いです！」

自炊していることを意外に思ったのか、セレスは感嘆とも思える表情を見せた。

「え？ 一人暮らししていれば、それくらい普通じゃないか」

セレスに限らず、自炊していることを人に話すと驚かれる。しかし、咲人としては自炊が当たり前の日常の一部となつてているため、特に誇るようなことではないのだ。

「いえ。私がずっと過去に契約していたご主人様は、一人暮らしだとこうのに、自炊はしていませんでしたね」

「ずっと過去？」

「ええ。私達幻獣は、人間よりも寿命がずっと長いので「なるほどな。今までいろんな奴と契約してきたワケか」まあ、人間とは異なる生命体なのだから、長く生きていても不思議ではない。

先程までは色々と突っ込みたいことばかりだったのだが、段々とセレスの不可解さに慣れてきてしまっていることに、咲人は少しやりきれない気分になつた。

いや、待て。

「……ってことは、お前って何歳？」

ちょっととした好奇心で、咲人はセレスに年齢を尋ねた。

だが、答えは返つてこない。セレスはワザとらしく咲人から視線を逸らし、陳列棚を見ている。

聞いてはいけないことらしい。

「まあ、いいや。でも、そのずっと前に契約していたご主人様つてのは、自炊無しで生活出来たのか？ 外食ばかりつてワケにはいかないだろ」

「いや、ごく稀に作つてたんですが、それ以前に食事なんかしていたらネトゲの時間がもつたといないとか

「……なんて不健康な生活なんだ」

「なんでも、『ネトゲの中だと俺は英雄なんだ』とか言つてました」ああ、典型的なダメ人間か。口には出さないが、咲人は素直にそう思つた。

確かに、高校時代にもMMORPGに嵌つて、家から出なくなつた同級生がいた。そいつも確かに、「今日はカノジョと湖畔をデートするんだ」とか「僕は有名な組織のリーダーなんだぞ」とかほざいていた。実にバカバカしい。そういう人間に限つて、現実世界での地位は低いのだ。スクールカーストでは、当然最下位である。所謂『Bランク』に属していた咲人には、関係ない話だが。

「ぶつちやけ、どうなんだそれは……」

「ええ、最低でしたね。幻獣使いとしてはそれなりでしたが、社会不適合者というか。食事は毎日ジャヤンクフードでした」

「うわ、こいつハッキリ言っちゃったよ。

まあ、でもJランク及びロランクの九割は、そのような運命にあるのだから仕方が無い。あとは、パワーパワーパワーするしかないのだ。

「話戻すけど、何食べたい？」

「ミルクシチューとか……」

「これまた時間のかかるものを。作れなくはないけどな」

軽く嘆息を漏らすと、咲人はシチューのルーを取り、消費期限を確認した。問題ないのを確認すると、買物がごへと投入する。次に向かうのは、乳製品のコーナーだ。此処でも消費期限と値段を確認し、もつとも良いものをかごへと入れていく。数日分の朝食になるであろうヨーグルトも、買うことにした。

あとは、シチューに入れる野菜と肉、そしてこの先数日間の食材だ。一人になつたため、少し多めに買う必要があるかもしれない。

「あー、コスプレ用の衣装は大量に持つてきただけど、他の生活必需品はどうなんだ？」

「大丈夫ですよ、しつかり持つてきたので」

少し自慢げに言うセレス。

意外にしつかりしているらしい。普段からこうであつてほしいのだが

「あとは、卵と朝食用のパンを多めに買っておくかな……」

あまり買いこみ過ぎても、あとで使わずに腐つてしまつたとなつては勿体ない。慎重に、これから献立と財布の中身に相談しなければならない。

「野菜と肉は？」

「お前は何もわかつちゃ いないな。確かに此処のスーパーは安いが、野菜と肉は、個人商店で買った方がより安く良い品質のが手に入るんだ」

「ふふつ、うふふふ……」

「何だよ、気持ち悪いな」

「いや、『主人様』って良いお嫁さんになりそつだなって『ケチくさい』と言われないだけマシだったが、そう言われるのは心外だった。

せめて、良い旦那さんになると黙つてくれ。そう思いながら、卵のパックを手に取つうとする。

刹那

「……なあ、なんか妙にピリピリしないか？ 空気が震えてるつつか」

確かに、この感覚は

「近いですね。こちらに敵意は向けていないようですが……、見られてるといつのは、あまり良い気分ではありませんね」

そう言つと、セレスは右手を掲げた。

その場に、特殊な空間が形成される。規模はあまり大きくないと判断したのか、セレスから半径三十メートルほどの、小規模なものだ。

結界である。空間を現実世界から一時的に切り離し、周りからの干渉を防ぐものだ。

「あら？ 気配を消したつもりなんだけ……」

そこに現れたのは、妖艶な姿の女性だった。

真っ黒なドレスを着てゐる。ワザとらしく胸元が開いており、そこから大きな胸がはみ出そつである。高貴といつよりも、淫靡といつ言葉が相応しい。髪型も凄い。メガ盛りとでも言つのだろうか、如何にお水っぽい髪型である。少し前に話題になつた、「昇天ペガサスMIX盛り」程ではないのだが、まさにキバクラ嬢のような女性である。

そして 背中から生える一対の翼。天使を思わせるかのような純白の翼と、悪魔を思わせるかのような黒みを帯びた紫色の翼だ。その出で立ちから、こちらの世界の者でないことは、非現実に引き

込まれたばかりの咲人でも、すぐに解つた。

「もう、ストーカーなんて趣味が悪いですよ、リイナさん」
そう言って、セレスはむーっと頬を膨らませる。咲人はちょっと可愛いく思つてしまつた。

「人聞きが悪いわね。私はただ、セレスちゃんの気配がしたから、寄つてみただけなのに」

「人聞きが悪いわね。私はただ、セレスちゃんの気配がしたから、寄つてみただけなのに」
「人聞きが悪いわね。私はただ、セレスちゃんの気配がしたから、寄つてみただけなのに」

「人聞きが悪いわね。私はただ、セレスちゃんの気配がしたから、寄つてみただけなのに」

「知り合いか？」

「知り合いも何も、私の上司ですよ。ユグドラシルの」

「そうか、上司なのか……って、ええええええええ！」？

我ながら、素つ頓狂な声を上げてしまつたと、咲人は思った。
こんな如何にもお水っぽい人が、中学生くらいにしか見えないセレスの上司なのか。いや、それ以前に、このような格好で街中を歩いている辺り、普通ではない。都内ならともかく、このような中規模な衛星都市のひとつに過ぎない町で見かけるとは。

「その子が、あなたの新しい契約主なのね。前の冴えないサラリーマンなんかより、ずっといい男じゃない」

「ふふつ、私もそう思います」

酷い言われようだ。ネトゲ中毒の契約主はともかく、咲人が契約する前の主が可哀想である。というか、少し前はその人のことで悲しんでいたような気がするのだが、気のせいだろうか。

「えーと、あのー」

「あら、いけない。自己紹介がまだだつたわね」

思いだしたかのように、有翼の女は胸元から名刺を取り出した。
結界を張つているとはいえ、少々大胆過ぎではないだろうか。

「私の名前は、リイナ。上級幻獣ルシファーの眷族よ。これから共に戦うこともあるかもしれないから、以後よろしくね」

リイナと名乗つた女性は、妖艶な笑みを浮かべてウインクした。

「俺は一条咲人です。なんか、よく解らないまま幻獣使いつてのに

なったんだけど……」

「それは、これから学んでいけばいいわ。ああ、それと、明日の夜、空いているようだったら、本部まで来てほしいな。場所は、セレスちゃんが知っていると思うから」

「はあ……」

なんか、次々と物事を進められてしまっているため、なかなか整理がつかない。

「基本的なことは、セレスちゃんから聞いていると思うけど……」

彼女達が、人間とは異なる存在であること。そして、その幻獣と呼ばれる者達を従えたのが、幻獣使いであること。

目的は、こちらの世界に現れる魔獣^{イヴル}という存在を倒すこと。そのようなことを聞いている。

しかし、考えてみると意外であつた。普段、何気ない生活を送っている中で、彼女達のような存在が戦いを繰り広げているなんて、誰が予想できるのだろうか。

「そうだ。挨拶代わりといつてはなんだけど、契約したことによつて発現した能力を見せてほしいな」

興味深そうに、リイナは咲人を見つめてきた。明らかに、駅前で勧誘しているような表情だ。副業で水商売でもやつているのではないだろうか。

特に断る理由もないため、安全な方向へと軽く念じてみる。

迸る電光。だいたいコツは掴めたためか、どのような形で雷を具現化するかも、コントロールできるようだ。しかし、まだ実戦経験が一度しかないため、いざ戦いとなつた時に使えるかどうか聞かれれば、これはまた別の話なのだが。

「わお、『雷撃』の能力ね。ボウヤ、なかなかやるじゃない

褒められたが、ちょっと複雑だつた。

確かに、強力な力なのだろう。しかし、だからこそ扱いには気を付けなければならぬのだ。

「ご主人様の中から、凄いパワーを感じたので、契約主に選んだの

です」

えへん、と胸を張るセレス。

「うふふ、正解よ、セレス。長年生きてきたから解るけど、この子は一般人の出身なのに、優れた力を身体に秘めているわ」とにかく、自分が凄いのは解った。

だが、このままだと置いてけぼりなわけで。

もう少し詳しく話を聞こうとしたが

「あ、いけない！ 早くお店に行かないと、遅れちゃうわ！」

腕時計を見て、突然慌てだすリイナ。午後六時を回っているよう

だが、何かあるのだろうか。

「それじゃあ、セレスちゃん。後のことば頼んだわよ！ じゃあね！」

それは、まさに一瞬の出来事であった。

張り詰めた空気が拡散し、切り離されていた空間が元に戻る。気がついた頃には、リイナという女性の姿は、その場から忽然と消えていた。

「上司って言つてたけど、何者なんだよ今の美人さんは」「美人というのは、咲人の本心である。お水っぽいとはいえ、美人であるかどうか聞かれれば、確実に否定することは出来ないような女性だつたのだ。

まあ、やつているうちに何とかなるか そう思いつつ、咲人は買い物を続けることにした。

セレスはさつきから嬉しそうなのが、何かあったのだろうか。にやにやしていて、ちょっと気味が悪い。

ちなみに、渡された名刺には、近所のキャバクラの店名が書かれていた。

第5話 光速の異名を持つ以下略

食材を買え揃えた頃には、すっかり空が黒く染まっていた。

冷たい風が、夜の街並みを駆け抜ける。秋も深まりつつあるため、そろそろ厚着を用意しなければならないだろう。

「結構冷えるな……。今度、古着屋いくかな。実家から送つてもらうのもアリだが、あまりカッコいい服無いしな」

「アレですか？ なんかガイアがオレにもつと輝けみたいなのを探すんですか？」

「アホか」

度々話題になる、勘違い系のファッショニオン誌に書いてあったキャッチコピーだ。痛々しすぎて、並大抵の中二病患者は裸足で逃げだすだろう。

「ファッショニオンかあ。過去に契約していたご主人様の中に、髪の毛を赤く染めて、男性なのに厚化粧をしている人ならいましたね。服装も真っ黒でシルバーアクセサリを大量につけて……」

「何処の三流バンドだよ」

「いえ、ただの高校生でしたよ。でも、毎日のように痛々しい歌詞を書いていました。勿論、楽器の演奏など出来ませんでした」

「ああ、アレか。暗い歌詞書いてる俺カッコイイって勘違いしている奴か。それとも、教室でドヤ顔で無駄に複雑なスコアを見ているような奴か」

ぐだらない話をしているうちに、公園についた。

秋の公園というのは、どうも寂しい感じがする。つい一ヶ月前までは緑色だった葉も徐々に色あせ、死へと向かいつつある一枚一枚の生命達が、壊れかけの電灯に照らされている。

当然、人の姿などほとんど見当たらぬ。目に付くのは、端の方でボロボロの毛布にくるまって寝ているホームレスだけだ。数年前までには、不良達がこの辺りの公園に集まっていたが、最近はあま

り見かけることが無い。時代は変わりつつあるらしい。咲人もその一員だったこともあつたため、更生したとはいえ、何処か複雑な気分だつた。

昼の時間帯も、昔ほど人が訪れなくなつてゐる。というのも、最近の親というのは、危ないという理由で子供を外で遊ばせないらしい。また、子供が怪我をしたからという理由で、遊具を撤去するよう求めめる馬鹿な親もいるのが現実だ。そのようなことだから、軟弱なガキしか育たないのだろう。少し血まみれになるくらいが丁度いいのだ。

そのため、昼の公園は、寂しそうにブランコに乗る中年の男性くらい 所謂、社会の負け組 しか見られなくなつてゐる。二十代三十代で失敗したのならともかく、あの年齢で首を刎ねられたのでは、再就職は厳しいだろう。そんな大人にはなりたくないものだ。自分の将来は、もう決めてある。大きな野望は無いが、既にそのための資格をいくつも取得してゐる。しかし、勉強ばかりではなく、適度に息抜きもしている。そうでなければ、大学でぼっちなどという負け組になりかねない。何事もほどほどが重要だ。

大学でぼっちはな人間ほど、哀れな存在はない。先週、最前列の右端にいたぼっちはが、周りの人間と話し合つように教授に言われたにも関わらずに何もせず、教室を追い出されたばかりだ。教室中の学生たちが爆笑したのは言うまでもない。勿論、咲人はそんなへマをやらかすことはなかつた。

しかし、新たな壁にぶち当たつた。

「お腹すきました……」

今日の朝から部屋に転がり込んできた少女 セレスを見て、咲人は軽く溜息をついた。

果たして上手くやつていけるのだろうか。将来のことはともかく、こいつとの付き合いをどうするかだ。コミュニケーション力に自身のある咲人だが、頭を抱えたくなるような状況に陥つていたのだ。

中途半端なことは嫌いだ。やるならば、徹底的にやりたい。しか

し、これは努力云々でなんとかなるようなものではないのだ。そもそも、現実世界の常識が通用しないようなことに、足を踏み入れてしまつたのだから。

「あれ、『ご主人様どうしたんですか？』まさか、休み明けに学校に行くのが嫌だとか？ あれですね、お昼は一人でトイレでパンを食べるようにな……ひぎいつ！？」

頬つぺたを引っ張つてやつた。じたばたとする姿が、これまた可愛らしい。

失礼な奴だ。充実しているわけではないが、そこまで酷いキャンパスライフなど送つていない。というか、一人で食べているのを見られて全然気にならない。

そもそも、便所飯など、都市伝説に過ぎないのでないだろうか。トイレで食事をするなど、とてもではないができない。そんなことをする人間など、いるはずがない。

「あにゃにゃにゃにゃにゃつ！ はにゃひひえ！ はにゃひひえごひゅひんひゃみやつ！ いひゅひゅひゃひゅひゅひょひょひー！」

「ちゃんと、人の言葉で喋りなさ」

ああ、そういうことか。

気配を悟ると、咲人はセレスの頬から手を離した。

「ふええ……」

涙目になりつつも、セレスは手を掲げて、公園内に結界を展開した。

それはつまり、彼女に関係する存在が、この近くにいることを表していた。

「来ますよ、『ご主人様』

頬を擦りつつも、真剣な表情で咲人に声をかけるセレス。

「えー、あれ言うのかよ？」

「そうしないと、私の封印が解けませんよ！」

「仕方ないな……」

咲人は一呼吸置くと、グレイプールを外すための、言葉を唱え始

めた。

「契約者イチジヨウ・サキトの名に於いて、幻獣セレスに命ずる。汝の真なる姿を、具現せよ！」

臭い台詞だと思いつつも、ひとつひとつに念を込めて、解除の言葉を紡いだ。

契約を結んでいる場合、契約主の言葉が無ければ、幻獣は本来の力を発揮できない。咲人の幻獣となつたセレスは、彼の言葉によつて、その真の姿を現すようになつたのだ。

「来ました！ 来ましたよ！ 力が湧いてきます！」

かしゃん。

乾いた音を立てて、首輪が外れる。

セレスの身体が、黄金の光に包まれた。夜だと言つのに、公園内が朝日に照らされたかのように明るくなる。もし、この結界とやらがなければ、人が殺到していたに違いない。

来ていたメイド服が光に解けるかのように消え去り、身長の割にかなり発育した少女の身体が露わになる。

そして

「お待たせしました、ご主人様」

そこには、真の姿を現したセレスが佇んでいた。

成長した身体つきに、猫耳と尻尾。野性的になり、露出が多くなつたが、不思議と淫らさは感じさせず、凛とした誇り高い戦士の如きオーラを、纏っているのが解る。

ワーキャット 猫と人間が合わさつたかのような出で立ちの幻獣である。

「相手も来たようですね。数は多いようですが、私達の敵ではありますん」

解放を待ち構えていたのか、一人を取り囲むかのように、討つべき敵が現れる。

「本当に大丈夫なんだろうな……」

あまり弱みを見せたくなかったのだが、心の中で思つたことが、

口にまでしまつた。

怖い。めぢやくぢや怖い。出来ることなら、逃げ出したいたが、
そんなことが許される筈があのうか。

中途半端なこと嫌いだ。一度やると決めたのだから、やるしかない。

「大丈夫です。それに、」主人様の熱意が、伝わってきて「います」にこりと微笑むセレス。その微笑みは可愛らしさよりも優しさを孕んでいるのが解る。まるで、弟子を温かく見守る師のようなそんな微笑みだ。

信頼されているのならば、期待に応えなければならぬだろう。実質、これが初の実戦だが、自分の出来ることを可能な限りやり通すつもり　いや、やってみせる。

意識を集中し、目標を捉える。襲いかかってきたのは、スライムのよつな魔獸だ。青紫色で玉葱型をしている。どうやら、魔獸といつのは、ゲームの世界に出るよつな個体ばかりらしい。

タイミングを見計らい、敵の頭上から一筋の雷撃を落とす。紫電の矢が降り注ぎ、スライムを次々と撃ち抜いていく。まだ精度は悪いものの、雷撃を受けたスライムは、その熱気の影響か、白煙を上げてその場から消滅していった。どうやら、仲間になるようなことはないらしい。

「お見事です、ご主人様」

その間にも、セレスは一倍以上の敵を倒していた。

ついさっきまでいた、学校の理科室に置いてある骨格標本のような敵は、粉々に砕け散つていた。その残骸と思われるような骨の一部が、地面に転がっている。あれだけの膂力でなぐられたのだから無理もないが、少々やりすぎではないだろうか。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

可憐のじくも酔ましに声ととむに、セレスの上段回し蹴りが、二

足歩行の狼のよつた魔獣の頭にヒットした。
ぶちん、と嫌な音が鳴る。だいたい何が起つたのか解つたため、

なるべくそちらを見ないように、咲人は自分の敵に集中する。あんなものを一日に何度も見せられでは、たまたまものではない。

敵の駆逐は順調に進んでいった。あまり強くないためか、然程苦戦するようなことはないようかに思える。

「ごばあああっ！」

人型をした黒い影が、咲人へと襲いかかった。

喧嘩に明け暮れていたために、反射神経には自信があつた。彼はその場から飛び退いて背後を取ると、魔獣の後ろから雷撃を放ち、その身体を撃ち抜いた。雷の熱により焼かれた魔獣は、甲高い断末魔の叫びを上げて、消滅する。

「くっそ……」

確かに、順調に倒せている。しかし、咲人の表情には、疲れの色が見え始めていた。

というのも、全力で雷を出しているためか、身体にかなりの負担がかかっている。やはり、実戦となると、話が違う。

「もう少しですよ、ご主人様」

セレスの身体は、魔獣の血液に塗れていた。格闘術だけで、これだけの殺傷能力を持つてているのだから、相当なやり手なのだろうか。戦いぶりも人間離れしているため、幻獣とは恐るべき存在なのかもしれない。もし、人間の身体での一撃を受ければ、まさに木つ端微塵に 完全に破壊されてしまうに違いない。

また、彼女は息ひとつ上げていない。表情に疲れた様子もなく、特に無理をしているようにも思えない。

幻獣とは、如何に強く恐ろしい存在なのか

「もう少しつつても」

左腕を何かが掠り、洋服の袖が切れる。疲れのためか、少し気を抜いていたらしい。幸い、中は切れていないようだ。

見てみると、小さな鬼のような姿の魔獣が、何かを投げようとしたらを窺っていた。咲人はその隙を与えようとせず、すぐに意識を集中させ、横一直線に雷を放った。

「しかし、妙ですね。魔獸にしては、動きが統率されているような

……」

今までの経験で、このように魔獸が波状攻撃をしかけてくることは、まずなかつた。

まず、魔獸という存在は、その辺りを徘徊している野良犬 それが凶暴になつたような存在 に過ぎない。意志を持つているとはいえ、ただ本能のまま襲いかかつてくる獸に過ぎないのだ。幻獸と同じような存在とはいえ、そもそもランクが違う。

確かに、魔獸達は群れを成すこともある。しかし、それでも幻獸とは知能レベルは異なるし、これほどの統率力は有り得ない。だとすれば、考えられることは

「なるほど、どうやら私達を狩ろうとしているみたいですね。小賢しい……」

短剣を掲げて襲いかかつてきた骸骨を連續攻撃で粉々に砕くと、セレスは悪態付いたような表情を見せた。

「なんか知ってるのか？」

先程買ったものが無事か確認しながら、セレスに背を預けて尋ねる咲人。卵が入つていたので気掛かりだつたが、特に割れている様子は無い。牛乳のパックも無事のようだ。

「ご主人様。最近、この辺りで何か起きましたか？」

「何かつて……ああ、そう言えば」

こここのところ、地元の新聞に載つてることを思い出す。

何気なく暮らしているが、最近、市内で殺人事件が何件か起つてゐる。そのためか、小中学校では、早めに授業を終えることが多いらしい。比較的治安の良い都市であつたため、住人達は驚きと不安を募らせている。

無差別殺人のようで、若い女の子が殺されたこともあるれば、一人暮らしの老人が殺されたこともある。ここ数日では、郊外のマンションでセールスマンが被害に遭つたらしいが

「やはり……。こちらにあの者がいるのは想定外でしたが……」

「なんだよ、あの者って」

「いるんですよ。力の使い方を間違つてしまつた、幻獣使いが」

「おい、それって……」

「ええ、そうです。ご主人様もその者の手下に襲われたのです」「なんてこつた。自分も下手したら、被害者の一員になつていたに違ひない。

「でも、いつたい何のために……」

「力を誇示したいのではないでしようか。弱い人間ほど、自分を強く見せようとする」

何処か引っかかる言葉だつた。

弱い立場にあるならば、努力をして這い上がればいいだけの話だ。何故、このようなバカバカしい手段を？

「不器用な人間というのがいるんですよ。それは、幻獣にも言えることですけどね」

吐き捨てるかのように言つセレス。

既に、彼女の周りには敵は残つていなかつた。咲人もなんとか、自分の周りの敵を駆逐し終わり、深呼吸をしている。

「さて、そろそろ……」

セレスの背後から、何かが襲いかかろうとしたのを、咲人は見逃さなかつた。

犬だ。それも、かなりの大型の。そいつが、まるで獲物を捕らえるかのようにジリジリと間合いを詰めている。

どうやら、倒し切れていなかつたらしい。犬は牙を剥いて、セレスの背後から襲いかかってきた。

声をかけたところで間に合つまい。それならば

「チイツ　！」

疲れて動くのも億劫だつた筈だが、気が付いたら身体が動いていた。

「きやつ、ご主人様　！？」

咲人はセレスを抱くように、そのまま地面に押し倒した。

やわらかい胸に顔をうずめる形になってしまったが、そんなのを気にしている暇などなかつた。

次の瞬間

少しでも遅かつたら、背中を抉られていたに違いない。一人がいたところに、重機で地面を掘り返したかのよつた跡が残つていた。

「つたく、お前が油断してどうすんだよ」

「申し訳ありません、ご主人様」

土を払いながら起き上がる一人。軽く打つた程度で、特に怪我をしていないのが幸い。

「それにも、何なんだよ今の奴は」

確かに、何かが襲いかかつてきたのを、咲人は見逃さなかつた。しかし、そいつの姿は既になく、殺風景な夜の公園が広がるだけだつた。

「一瞬だけど、見えたんだよ。お前は気付かなかつたのか?」

「申し訳ありません。気配はしたのですが、ご主人様が声をかけなければ、攻撃を受けていたでしょう。姿はとらえられましたが……」

物音や嗅覚で追つているのだろうか

「姿は、大型の犬のようなものでした。私達の定義だと、ヘルハウンドの個体ですね」

過去に、ゲームや西洋の文献を見たことがあるので、その名は聞いたことがあつた。

「……とりあえず、さつさと帰ろつぜ」

第6話 最初の晩餐

「……」
十数年前にちびっ子たちの間で流行ったアニメのオープニングを歌いながら、咲人は夕食の支度をしていた。ちなみに、彼は射手座である。

彼がかき混ぜる鍋の中ではミルクシチューが煮立つてあり、クリーミーな香りが部屋中に漂つていて。もうすぐ、出来あがるだろう。一方、セレスは力ピバラをモチーフにして作られたキャラのぬいぐるみ しかし、どう見ても力ピバラには似ていない にまたがり、相変わらずＰＳ3で遊んでいる。

「ご主人様つて星座は何ですか？」

「……射手座だけど？」

歌うのを途中でやめて、咲人はセレスの問いに答える。次に何を言つてくるかは、だいたいではあるが、想像できた。この歌を歌つていて、星座の質問なら、ひとつしかない。

「ああ、力ピ「よく死んだけど、原作では戦っている描写が無い空気な人ですね。アニメでは回想シーンで戦つてましたが、技名がアトミックサンダー・ボルトとかいう、無理矢理付けた感じの」

「お前は何を言つているんだ。アイオロスなめんなよ。アイオロスがいなければ、ストーリーは始まらなかつたんだぞ」

現在では考えられないことだが、当時の子供達の間では、星座力ースト制度なるものが存在した。牡牛座と蟹座と魚座の子供達が弄られキャラとして確立したのは、言うまでもない。アニメの中の話だが、子供というのは残酷なものだ。咲人は少し後の世代だったため、星座力ースト制度の被害をあまり受けずに育つたのだが、自分の星座をなめられるとやはり腹が立つた。

「それで、お前はどうなんだよ」

「獅子座ですけど」

「チツ……弟の分際で……」

マイナス面がほとんどの、勝ち組の星座だ。もしこれで負け組の星座だったら、散々に弄つてやるうと思ったのだが。

星座カースト制度の話題にうんざりしていると、テレビから激しい銃声が響いてきた。

「もつと鉛が欲しいかツ！ 泥でも舐めてろツ！ 僕の銃弾は地獄への片道切符ツ！ てめえは自分の血だまりで泳いでろツ！」

なんてアグレッシブな発想だ。エレガントにも程がある。

小物臭い台詞である。というよりも、重度の中二病と思われてもおかしくない台詞だ。見てみると、美少年が宙返りをしつつ拳銃を乱射していた。しかし、主人公ポジションなのに、その台詞は如何なものだろうか。

「悪いけど、もうちょっと音量落としてくれ。苦情が来たら面倒だ。少し前にも、大音量でドラムをやつて追い出された莫迦がいるんだ」料理に夢中のため、咲人は声だけをかけてシチューの鍋の火を止めるが、戸棚から包丁とまな板を取り出すと、丁寧に洗つて、その上に買つてきたキャベツとトマトを転がせた。行きつけの青果店で手に入れたものだ。旬ではないが、都市の近郊で栽培された採れたての野菜である。

そういうえば、少し前のアニメに、キャベツが謎の球体として描写されたことがあったな。原作は良かつたのに残念だ。そう思いつつ、野菜を切る作業に入った。

乾いた音が響き、野菜が切られていく。器用なわけではないが、毎日このように自炊をしていれば、自然と包丁さばきも身に付いてくるものだ。

「もう出来るぞー」

ゲームに夢中なセレスに声をかける。ここでよく返つてくる答えは、「まだセーブできない」なのだが、素直に従つてているあたり、余程お腹が減つているのだろう。

サラダを盛り付け、ミルクシチューを器に入れる。主食はパンだ。

出来あがつた料理を運び、卓袱台の上に並べていく。今まで一人分の食事しか作らなかつたためか、まだ余裕はあるものの狭く感じられた。

「わあ、美味しそうですね、『ご主人様』
たいした物を作つたわけではないのだが、セレスは目を輝かせて
いる。

「ちゃんと手洗つてな。足りないようだつたら、おかわりもあるか
ら」

なんだか、歳の離れた妹を持つたような気分だつた。セレスが手
を洗い終わつたのを確認すると、二人揃つて食卓に就いた。

「いただきます」

「いただきます」

手を合わせて、挨拶する二人。

セレスは、早速リクエストしたミルクシチューに手を付け始めた。
育ちは良いのだろうか、意外に行儀が良い。汚らしい音も立てず、
美味しそうにシチューを口に運んでいる。

「美味しいです、ご主人様」

「おう、満足してもらえて何よりだ」

咲人は、素直に嬉しいと思つた。普段、誰にも料理を振舞うこと
が無いため、このように素直に感想を言つてもらえるとありがたか
つた。また、一人暮らしをしていると、どうも食事の時間というの
は寂しい。しかし、今はこうやって、一緒に食べる相手が出来たの
だ。そう考へると、悪くないかも知れない。

「食事中に申し訳ないんですが、さつきのことでお話が」

「ああ。俺もそつちの人間になつたわけだからな、ちゃんと聞くよ」

「……あのような行動は、なるべく慎んでいただきたいです」

ワンテンポ置いて、セレスは話し始めた。彼女の表情からは、笑
みが消えていた。

少し怒つているようだ。普段の天然じみた、ちょっと抜けたよう
な雰囲気は無く、真摯な態度と口調で、セレスは話している。戦闘

時の凛とした印象は無いが、サファイアのよう澄んだ双眸で見つめられては、咲人も真面目に話を聞かざるを得なかつた。

「何のこと つて、ああ……」

少しの間考えたが、すぐに答えは出た。

公園で魔獸^{イガル}が襲いかかつて来た時、最後の一體の存在を目視した咲人は、セレスを突き飛ばして魔獸から守つたのだ。自然と身体が動いたので自覚はなかつたのだが、今思い出してみると、かなり無謀なことをしたとことを思い知らされる。その証拠に、身体の何ヶ所かを打ちつけてしまつてゐるのだ。

「魔獸の攻撃を一度や二度受けた程度で斃されるほど、私達はヤワではありません。しかし、生身の身体で一撃を受ければ、ひとたまりもありませんよ」

その魔獸が、大型の犬だつたことは覚えている。そいつの攻撃で地面が抉られたのだが、それこそ重機で土を掘り返したかのような爪跡が残つたのだ。もし、自分があの攻撃を受けていれば、背中をザッククリと いや、真つ二つにされていたかも知れない。

「悪い……」

食事の手を止めて、スプーンを手放す。皿にスプーンが当たり、乾いた金属音が空しく響いた。

「……でも、私を守るうとしてくださつたんですね」

セレスも食事の手を止め、申し訳なさそうに俯いている。

「解らねえよ。何か知らないけど、あの時は勝手に身体が動いてたんだ。多分、心の何処かで、お前を守らないと そう思つてたんだろうな」

自分は何を言つてゐるのだろうか。恥じらいからか、顔が熱くなつてくるのが自分でも解つた。

「ありがとうござります。……私ももつと強くならなければなりませんね」

にじりと微笑むセレス。

じうして見てみると、やはり美少女であることが頷ける。常にこ

んな感じならばいいのに

そう思いながら、咲人はスプーンをとつて、シチューを口に流し込んだ。

と、その時。

『テー テー テ テー テー テー テー テー テー、 テー テー テ テー テー テー テー テー テー テー』

床に放り投げてあつた咲人の携帯から、『インペアル・マーチ』帝國軍のテーマが流れてきた。画面表示を見ると、そこには「一条咲亜」という名前が表示されていた。

「……姉貴かよ。悪いな、ちょっと出てくるから食つてていいぞ」
どういうわけか、咲人は顔を真つ青に染めながら、リビングからそそくさと出て行つた。

「……はあん、これは何かありますね。『主人様の秘密を握るチヤンスかもしだせません』

気になつたセレスはこつそりと咲人の後をつけて、扉の向こう側で通話をしている彼に耳を傾けた。すると、今までの咲人からは想像もつかないような、何処かビクビクとした声が聞こえてきた。
「えつ、ちょっと勘弁してよ姉さん。えー、ちょっとマジ無理だつて。いや、ほらね、こつちも生活が……。え、あ、はい……はい……、『ごめんなさ……はい……』

「むう、これはお説教でしょうが。『主人様のお姉様というのは、厳しい方なのでしょうかね』

今までの咲人の態度が嘘だつたかのように、妙にしおらしくなつてゐる。相手に姿が見えていないというのに、ペコペコと頭を下げている。まるで、取引先と不備があつたのを電話で詫びてゐるビジネスマンのようだ。

いつたいどのよつな内容なのだろうか。相手の声が聞こえてこないのが残念だ。

「いや、そうじゃないけどさ。もしかしたら、俺出掛けるかもしないし。うん。そうそう、友達の家とかで飲むかもしない。いや、

発表はずっと先だし、試験もまだだし……ええ？ アパートの管理人さんに話つけてる？ いや、そうじゃないけど……、いえ、なんでもねえ……じゃなくて、なんでもないです。すみません……。うん、解つた……、大丈夫、こまめにやつてるから……、はい、大丈夫です……はい、では……」

長電話になると思いきや、意外に早く終わつたらしい。

「……いつからいた？」

「あ……」

「ひそりと盗み聞きするつもりだつたのだが、見つかつてしまつたらしい。セレスは気まずそうに視線を逸らせようとしたがどちらにしろ、このまま制裁を食らうのならば、思い切りからかつてやるう。そう判断したセレスは、口元に手を当てて意地の悪そな笑みを浮かべ、咲人に向き直つた。

「ははあん、お姉さまには頭が上がらな　ひぎいいいいいいいいつ！」

最後まで言おうとしたが、咲人の動きの方が数段速かつた。

「てめ、このやろ、人の電話を勝手に盗み聞きしやがつて！」

咲人は喚きながらセレスを押し倒し、彼女の頬を思い切り抓つた。
「ふにゃああああ、ひやめひえ！　おひやひやひやいひえ！」
もつれ合うようにして地面を転がる一人。傍から見たら、恋入同士がじやれあつてゐるようにしか見えない。

「クソツ、いいか、このことは絶対口外するなよ！」

「わひやひひやひひやつ！　わひやひひやひひやひや！　ひやひやひひえええつ！」

涙を浮かべて大声で喚くセレス。流石にこのままでは可哀想と思つたので、咲人は満足したところでセレスの頬から手を放した。

「ふええええ……何なんですかもう……」

「そのな……、今度姉貴がウチに来るみたいなこと言つててさ……」

先程の電話の内容を思い出し、頭を抱える咲人。

咲人には、二歳年上の姉がいる。現在は就職しており、あまり顔

を合わせることが無いのだが、度々電話やメールが入ってくるのだ。その度に、咲人は悩まされている。というのも、過去に色々あったために、姉に対しても頭が上がらないのだ。

「いいじゃないですか、別に」

けろつとした表情で、何の問題もないように答えるセレス。

「あのな、誰のせいで悩んでいると思ってやがる」

そう。姉が来るというだけなら、たいした問題ではない。

だが、セレスのことをどう説明するかだ。幻獣がどうのこうのと言えば、姉は真っ先に咲人の頭の中身を心配するだろうし、女の子と同居しているということを色々と言われる 散々に弄られるに違ひない。

そして、何よりもセレスの見た目が明らかに中学生くらいにしか見えないことだ。首輪も装備しているため、色々と誤解を生みかない。以前、ヤバい性癖を持った輩が捕まつたことがあつただけに、色々とマズイのだ。

「ちょっと自意識過剰だと思いますよ。というか、自意識過剰な男つてキモいひきいひい！」

この莫迦は少々調子に乗りすぎじゃないだろうか。

やり場のない焦りを抱えながらも、咲人は再びセレスの頬を引っ張つた。

第6話 最初の晩餐（後書き）

星座力ーストとか、今の子は解るんだろうか。
ちなみに、自分は天秤座です。ヨーダとかいってな。

アグレッシブでエレガントな……のくだりが解った人とは友達になれそう。

自分はトラエースのゲーム結構好きなんですよ。
あ、聞いてませんね。すみません。

ひとまず、第一章が終わった感じです。
出会いみたいなのを描きたかったんですが、どうもこまいち……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4010p/>

Beast Tamer

2011年7月30日03時23分発行